岩倉城跡出土の陶磁器

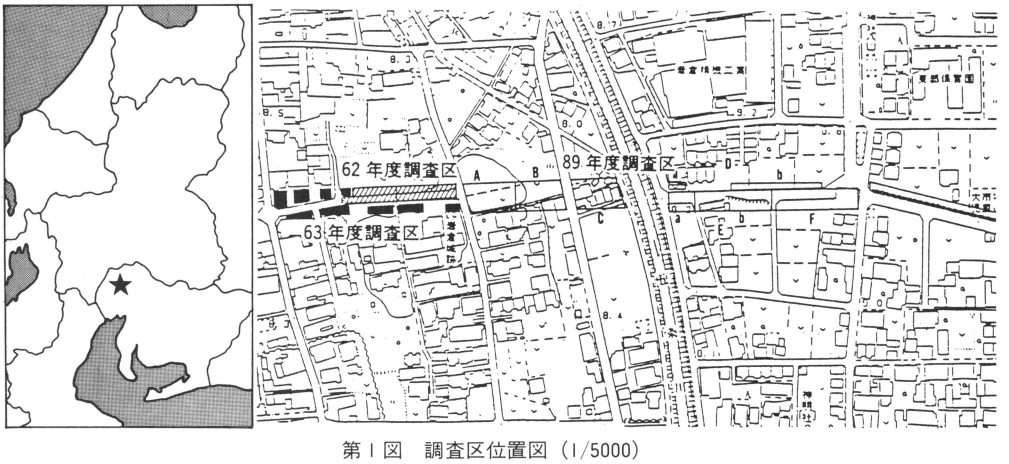
松原　隆治

Ⅰ　はじめに

最近では全国的に中・近世の城館跡の発掘調査がかなりの数に上り、愛知県下でも名古屋城三の丸遺跡、清洲城下町遺跡などを初めとする織豊期の城郭の調査例が多くなり、16世紀代の資料の増加が顕著である。こうした消費地遺跡の遺物・遺構の年代決定に際し、文献記録による城郭の存続期間を考慮しながら、生産遺跡である窯跡調査による遺物の編年を利用することが通例であった。このような状況にあって、消費地遺跡なりの遺物の年代決定の方法があるのではないかとして、複数の城郭の存続年代と発掘調査による出土遺物の分析から編年を行い、従来の窯跡調査による遺物の編年に対して幾つかの問題提示がなされた（鈴木　1990）。消費地側と生産地側とそれぞれに編年を行うことによって、より正確な編年が可能であることが明らかにされたといえよう。

ここでは、消費地遺跡出土の陶磁器の編年を検討するための若干の資料提示を目的として、織豊期の代表的な城郭の一つである岩倉城を取り上げ、切り合い関係の明らかな遺構出土の遺物を紹介したい。

なお岩倉城跡（県遺跡番号1105）は愛知県岩倉市下本町字城跡に所在し、五条川右岸の標高約10mの自然堤防上に立地すると推定されていたが、県道建設に先立つ発掘調査が進むにつれて、五条川左岸の大市場町にも城郭が広がることが次第に明らかになってきている（第１図）。



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）

II　文献による岩倉城の存続年代（水野　1985）

岩倉城の築城年代ははっきりしない。ただし、稲沢の下津にあった守護所をめぐって、織田敏定と織田敏広が争い、文明11年（1479）の和睦まで混乱が続き、和睦後は織田敏広が岩倉に在城したことは、ほぼ間違いないと考えられている。したがって1479年には岩倉城があったことは確実であろう。城主については、織田信長が尾張統一後に系図を操作したらしく、確実には解明できていない。諸説があるものの、最近注目されている「前野家文書」によれば、敏広…寛広…敏信…信安…信賢と続き、永禄二年（1559）に信長に攻め滅ぼされたらしい。

初代岩倉城主であった敏広は応仁の乱頃を中心に活躍した人物で、文明13年までには没したらしい。幼少の千代夜叉丸（寛広）が後継者になったすきに乗じて、清洲の織田敏定は長亨２年（1488）岩倉城を落城させた。寛広は下津へ逃れたらしい。岩倉城へは敏定の子の敏信がはいった。明応４年（1494）美濃の斎藤氏とその家臣石丸氏との争いに端を発して、尾張でもそれぞれ姻戚関係から、敏定・敏信と寛広の争いになり、敏定は陣中で病没、敏信は戦死した。敏信の跡を弟の六郎（信安）が継いで、寛広と戦ったが翌年、両者は講和した。信安については確実な資料が乏しく、ほぼ半世紀にわたって岩倉城主の事跡は空白である。一方、清洲においては三奉行のうち織田信秀が勢力を伸ばし、ついにはその子織田信長が弘治元年（1555）清洲城主になった。翌年、美濃の斎藤道三が子の義龍と戦って長良川畔で死んだが、この時、道三支援に出掛けた織田信長軍に対して、信安は下之郷村に火を放って後方攪乱を狙った。その後、岩倉では信安の跡を長男の信賢と次男の信家が争い、弘治３年か永禄元年(1557か1558)信賢が家督を継いだ。信長は、永禄元年五月と七月に岩倉城攻略を謀ったが、このときは主として城外での戦闘にとどまった。信長は、翌年春に再び岩倉城を攻めた。城下町を焼き払い、数か月の籠城戦の後、落城させた。岩倉城は破却され、ことごとくはき捨てられた。

したがって、岩倉城は寛広と信安の頃の記録が乏しいが、少なくとも1488年と1559年の二度の落城とそれによる建物の焼失の可能性が考えられる。

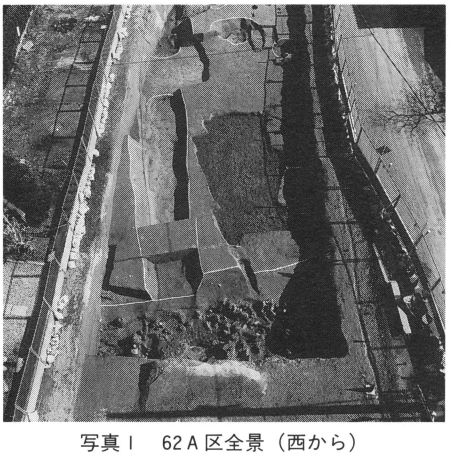


写真１　62Ａ区全景（西から）

III　遺構の検討

ここでは、62Ａ・Ｂ区で検出した遺構のうち、62Ｂ区の焼土層と62Ａ区の溝ＳＤ03上層・下層、ＳＤ01′、ＳＤ01を検討対象として取

り上げ、切り合い関係から新旧の順序を把握する。さらに、63Ｂｃ区でも焼土層とＳＤ03の一部が見つかっているため、その成果も加える。(第２図、写真１)。

１　焼土層、ＳＤ03上層、ＳＤ03下層（写真２、第３図）

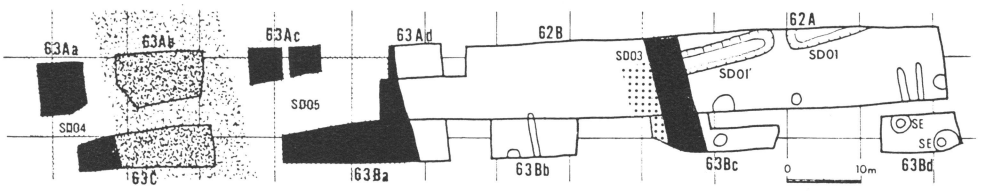
焼土層を62Ｂ区の東端と63Ｂｃ区の西端で検出した。ＳＤ03の西側の肩の検出面より約10cm下で確認、南北に長く、幅３ｍ、長さ５ｍ、厚さ10cmであった。１cm程から拳の半分ほどの大きさの焼土の塊に炭化物の細粒が密に混じって広がっていた。焼土塊を注意してみると、スサが明瞭に確認でき、また平滑な面もある事から建物の壁土が焼け落ちたものと考えられる。ＳＤ03を検出した時点では焼土層はまだ確認できなかったこと、焼土層を検出したときＳＤ03では焼土層は認められなかったことから、焼土層はＳＤ03より古いことは明らかである。焼土層のもとになった建物とＳＤ03が同時に存在していたと仮定すると、建物がＳＤ03の西に接していたことになるから、建物の焼失に際して、焼土層と同様に多量の焼土がＳＤ03の底に堆積しているはずである。しかし、実際にはＳＤ03の最下層でわずかに焼土塊が確認できただけである。この事は建物の焼亡の後、しばらくして建物が在った位置に少し重なってＳＤ03が掘削されたことを物語っている。溝の底の焼土塊は、溝の斜面に覗いた焼土層から転落したものである。

ＳＤ03の最下層は灰色粘質土で滞水状況を示していた。木製品や土器が出土した。この上に厚く砂が堆積し、やや東へずれて再び溝が掘削されていた。最初の溝（幅5.4m、深さ２ｍ）とその埋土をＳＤ03下層、再掘削した溝とその埋土をＳＤ03上層とする。

ＳＤ03上層は、家屋転居の際に掘削された大規模なごみ穴によって、東側の肩を攪乱され、規模は推定せざるをえない。幅７ｍ、深さ1.7m程であろう。最下層に灰色粘質土があり多量の土器、陶器、木製品などに混じり、火を受けて表面が赤く変色した拳大の河原石やもとは人頭大の規模だったらしい割れた河原石が土のう袋に３袋出土した。岩倉城が焼けた記録は無いが、織田信長に永禄２年（1559）に攻められて完全に破壊され、その後は近年に至るまで長く畑であったことから、ＳＤ03上層の焼けた河原石は、信長によって城は火を放たれたこと、多量の遺物は、焼け落ちた城跡を片付けて畑にする際に、溝が邪魔な物を捨てたごみすて場であったことを想像させる。したがってＳＤ03上層の遺物は1559年頃の一括遺物である可能性が高いと言えよう。

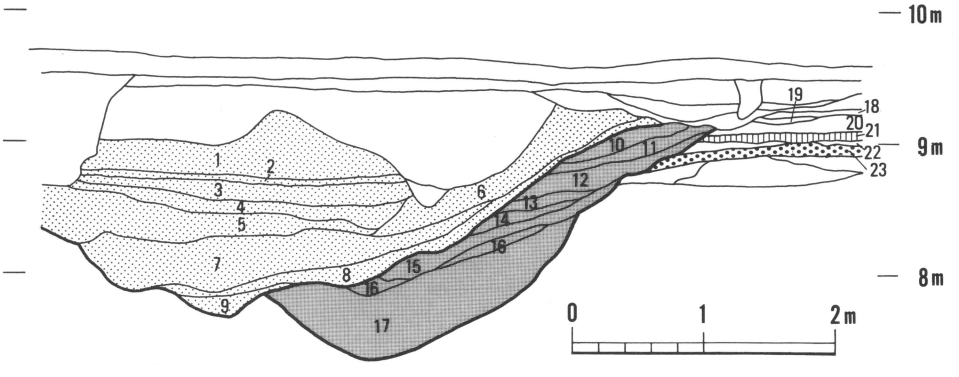
２　ＳＤ03上層、ＳＤ01′

ＳＤ01′はＳＤ03の北端近くで確認した東西にのびる溝で、検出面での幅2.7m、深さ１ｍ。底でわずかに滞水性を示し、土器、陶器、木製品などが出土した。ＳＤ03上層とＳＤ01′の関係を知る手掛かりとしては、両者にまたがる位置に残した畦の南壁セクションがある。畦はＳＤ01′の中央に、東西に長く、ＳＤ03にかかるように設定した。東から西へ斜めに落



第２図　昭和62・63年度遺構配置図（1/1000）

写真２　62Ａ・Ｂ区ＳＤ03南壁セクション



1　ＳＤ03上層（オリーブ黒色10Ｙ3/1砂質土）
2　〃　（オリーブ黒色7.5Ｙ3/1砂質土）
3　〃　（オリーブ黒色7.5Ｙ3/1砂質土）
4　〃　（暗オリーブ灰色2.5Ｇ Ｙ4/1砂）
5　〃　（オリーブ黒色10Ｙ3/1砂質土）
6　〃　（黒褐色2.5Ｙ3/2砂質土）
7　〃　（黒色7.5Ｙ2/1粘質土）
8　〃　（黒色7.5Ｙ2/1粘質土）
9　〃　（灰色7.5Ｙ4/1粘質土）
10　ＳＤ03下層（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）
11　〃　（オリーブ褐色2.5Ｙ4/3砂）
12　〃　（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）
13　ＳＤ03下層（黄褐色10Ｙ Ｒ5/6砂）
14　〃　（暗褐色10Ｙ Ｒ3/4シルト）
15　〃　（灰オリーブ色５Ｙ4/2砂）
16　〃　（暗オリーブ褐色2.5Ｙ3/3砂質土）
17　〃　（オリーブ黒色2.5Ｙ3/3砂質土）
18　〃　（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）
19　〃　（褐色10Ｙ Ｒ4/4砂質土）
20　〃　（暗褐色10Ｙ Ｒ3/3砂質土）
21　焼土層（赤褐色５Ｙ Ｒ4/8焼土）
22　〃　（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂）
23　14世紀遺物包含層（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂）

第３図　62Ａ・Ｂ区ＳＤ03南壁セクション

ちる土層とそれに切られた水平な堆積を示す土層を確認した（写真３）。これによってＳＤ01′がＳＤ03上層より古いことがわかる。ＳＤ01′をそのまま西へ延ばすとＳＤ03下層と切り合うことになる。ところがＳＤ03下層の西にはＳＤ01′が認められないことから、ＳＤ01′とＳＤ03下層は同時期に存在した遺構と考えられる。

３　ＳＤ01′、ＳＤ01

ＳＤ01はＳＤ01′とは上端幅約２ｍの掘り残し部分をはさんで、東へ伸びる溝である。北側の肩は調査区外になるため、規模は不明である。しかし溝の南側の傾斜や深さからＳＤ01′とほぼ同規模と推定できる。最下層の滞水性を示す灰色粘質土からは、多くの木製品や土師皿が出土した。調査区北壁（写真４、第４図）は溝に対して斜めの位置関係のためやや見にくいが、溝の掘り残し部分の上面、標高９ｍ付近にかなり固くしまった薄い層があり、道として機能していたことが推定できる。ここを土橋と考えることに無理はないと思われる。土橋をはさんで東西へ対称的にＳＤ01′とＳＤ01へ続くのでＳＤ01′とＳＤ01は土橋と共に同時期の遺構といえる。

したがって焼土層→ＳＤ03下層・ＳＤ01′・土橋・ＳＤ01→ＳＤ03上層という時期的な移り変わりを指摘できよう。

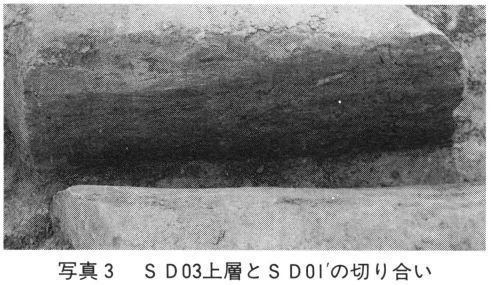


写真３　ＳＤ03上層とＳＤ01′の切り合い

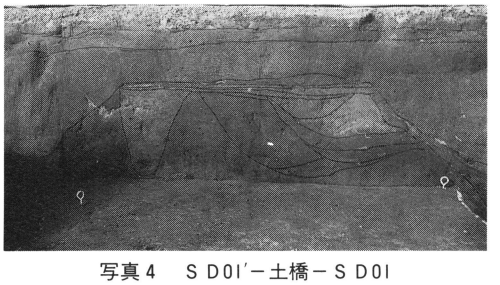
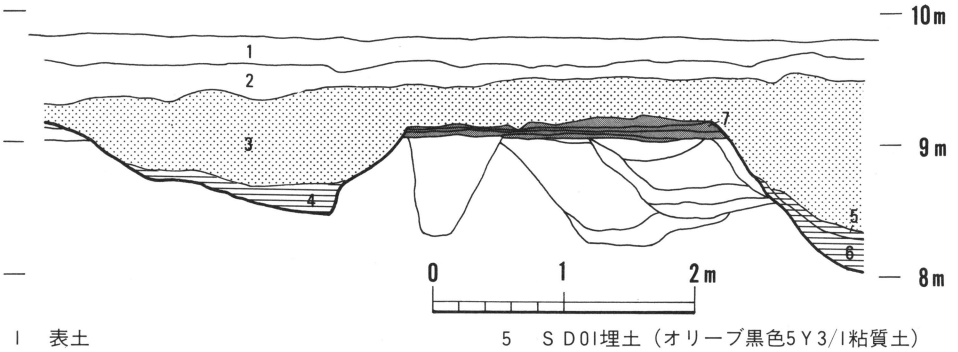


写真４　ＳＤ01′－土橋－ＳＤ01



1　表土
2　耕作土（褐色10Ｙ Ｒ4/4砂質土）
3　整地層（褐色10Ｙ Ｒ4/4砂質土）
4　ＳＤ01′埋土（黒褐色10Ｙ Ｒ3/2シルト）
5　ＳＤ01埋土（オリーブ黒色5Ｙ3/1粘質土）
6　ＳＤ01埋土（黒褐色2.5Ｙ3/1粘質土）
7　土橋（にぶい黄褐色10Ｙ Ｒ4/3砂質土）

第４図　ＳＤ01′－土橋－ＳＤ01セクション

Ⅳ　遺構出土の陶磁器

明らかになった遺構の相対年代順に、遺物について検討をする。

1　焼土層出土遺物（写真５、第５図）

一般的に城郭から出土する貿易陶磁の割合は、数％に過ぎない。しかし、この焼土層はかなり異常で、48％もの高率である。実測図を描けないような細片を含めても土師器皿29点、天目茶碗３点、擂鉢３点、鉢６点、壺８点、その他25点、計74点に対して、貿易陶磁は染付31点、白磁７点、青磁25点、合計63点を数える。

①土師器皿　１・２のいずれもろくろ整形の軟質の皿である。内面は丁寧に仕上げられ、外面底部には糸切り痕が明瞭に残る。１は口縁部が直線的にのびる。黒く油煙が付着しており、灯明皿として使用されたことが明らかである。２は口縁部が内湾気味に終わる。細片のため図示できなかったが、内面を丁寧に撫でて仕上げ、外面にはかなり凸凹と指圧痕を残す直径６cmほどの小皿が１点だけ含まれる。

②天目茶碗　３・４共に高台が残存していない。口縁部は直立し小さく外へ折れる。３は全面に厚く鉄釉が掛かる。４は内外面ともに鉄釉がかかり外面下半にサビ釉の化粧掛けが施される。いずれも瀬戸・美濃製品で大窯Ⅰ期の特徴を有する。

③擂鉢　口縁部の小さな破片しかない。５は口縁端部が内側に断面三角形状に突出する。６は口縁部内側に小さく折れるが外面にも小さい縁帯が形成されている。

④鉢　７は、全面に擂鉢と同様な薄いサビ釉を施す。内面は丁寧に仕上げられているものの、外面は粗くろくろ目が残る。口縁端部はまるく終わる。５～７は黄白色の胎土である事から、瀬戸で生産されたと考えられる。

⑤壺　８はかなり堅く焼きしまり、白色の砂粒が混じる。そのうえ内部から白色の粟粒のような吹き出し物が認められ、表面はザラついた感じが強い。信楽焼きであろう。９は体部の下半部で外面には褐色の釉薬が厚く掛けられている。露胎の削り出し高台がつく。

⑥染付　10は碗で、端反りの口縁部の内外面に界線がある。外面には界線の下に唐草文らしい花文が認められる。小野分類の碗Ｂ群に属する（小野　1982）。11～14碁笥底の皿で、いずれも見込み部に２条の界線があり、10・11はその内側に花文が描かれている。小野分類の皿Ｃ群に属する。15～19は付高台の皿で、15・16は端反りの口縁部である。18・19はいわゆる折縁の綾花皿で、口縁を綾花形にヘラ

写真５　焼土層中の遺物出土状況

切りし、強く外方へ曲げている。

⑦白磁　20は端反りの皿で、他に同一固体らしい破片が4点ある。21は灰色の胎土で、陶質の焼成。口縁部は緩く外方へ開く。端部は角にヘラ切りされており、長石に似た釉が厚く掛かり、細かい貫入が認められる。遺構の年代が肥前陶磁の開始以前であることはまず間違いなく、朝鮮からの輸入品と考えられる。

⑧青磁　22は酒会壺の蓋らしい。上面には鎬文を示す2条の縦方向の線がある。淡い青緑色の釉が厚く掛かる。23は外面に線刻の蓮弁文をもつ碗である。24・25は鉢の一部で内面にヘラで花文が彫られている。25は高台が欠けているが、底裏には蛇ノ目に釉が掛かっている。

2　ＳＤ03下層出土遺物（第6図）

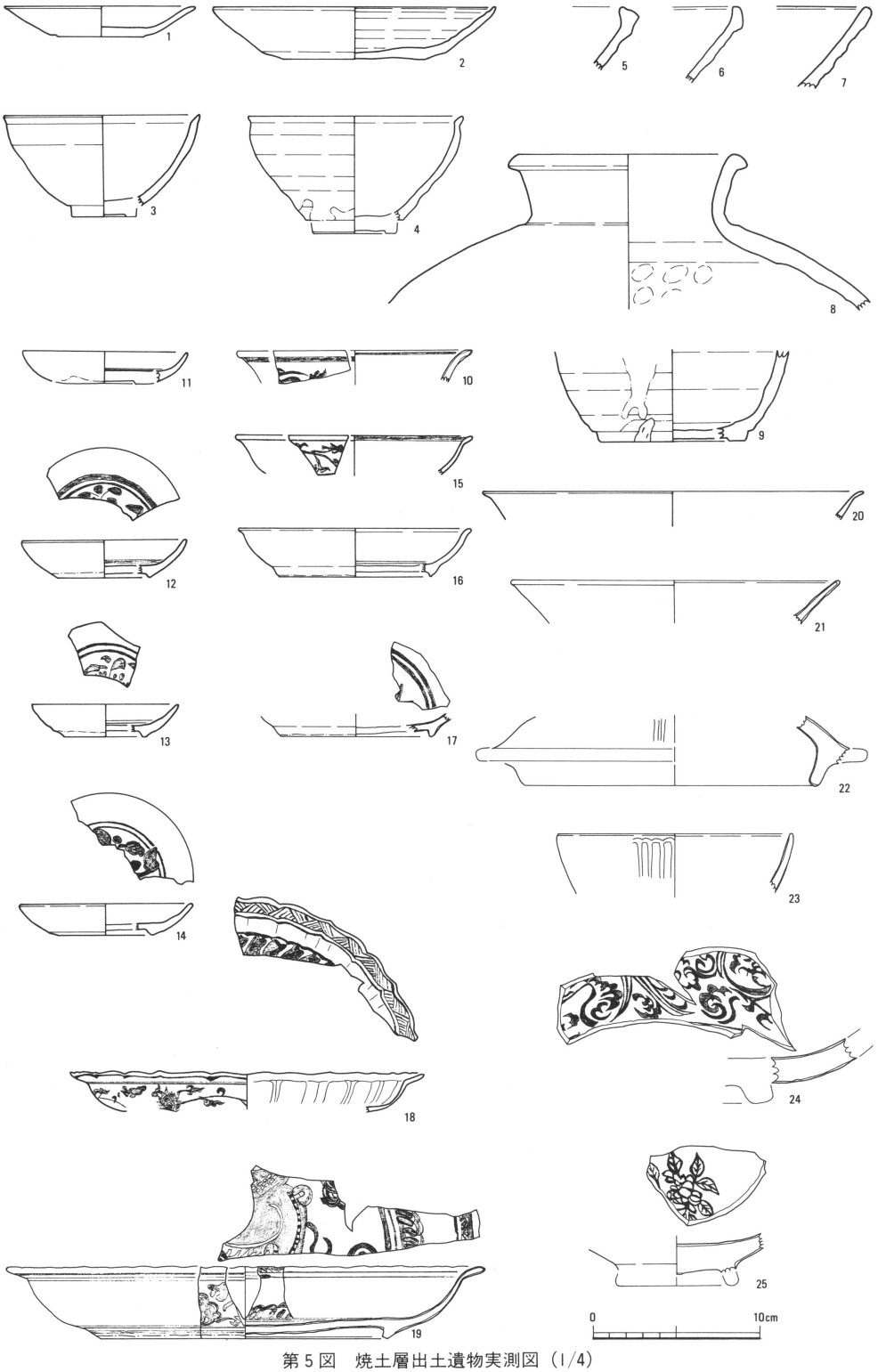
板切れなどの加工材の他には遺物は少なかった。26・27はロクロ成型の土師器皿。糸切り痕から外側へ1cmほどほぼ水平に拡げた後、逆ハ字状に直線的にのびる体部を形成。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整。28は擂鉢である。口縁部外側に小さく断面三角形の縁帯がつく。瀬戸・美濃製。

3　ＳＤ01′出土遺物（第6図）

土師器皿がまとまって約20点出土したほかは陶器、磁器はほとんど見られなかった。29は土師器皿である。ロクロ成型。糸切り痕の端から体部を形成。口縁部は外反気味。30は酒会壺である。底径16cm、外面に鎬文がある。畳付き以外は厚く青緑色の釉が掛かる。磁胎は灰白色。

4　ＳＤ01出土遺物（第6図）

検出した遺構の面積の割に、出土遺物は多く、土師器皿は60点ほど集中して出土した。31～33は土師器皿である。31は非ロクロ成型。直径約7cm。端がやや反り上がる広い底部から、体部は短く折れて外反気味の口縁部になる。内面は不定方向のナデ調整。体部外面は丁寧な横ナデ。32はロクロ成型。内外面ともに回転ナデ調整。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿としての使用がわかる。33はロクロ成型。糸切り痕からやや外側へ広げてから体部が立ち上がる。内外面共に丁寧な回転ナデ調整。34は灰釉の皿の底部である。見込み部の釉は薄い。外面底部は露胎。削り出し高台。35は灰釉の折縁深皿。内外面とも口縁部5cmほど施釉。34・35は古瀬戸後期の製品。36は染付碗である。端反りで、口縁部内外に界線、外面に唐草文が描かれている。小野分類の碗Ｂ群である。37は青磁の綾花皿。折腰で口縁部に向かい緩く外反する。内面には口縁に沿って1条の沈線が認められる。ややくすんだ青緑色の釉がかかり、磁胎は灰色である。



第５図　焼土層出土遺物実測図（1/4）

5　ＳＤ03上層出土遺物（第６図）

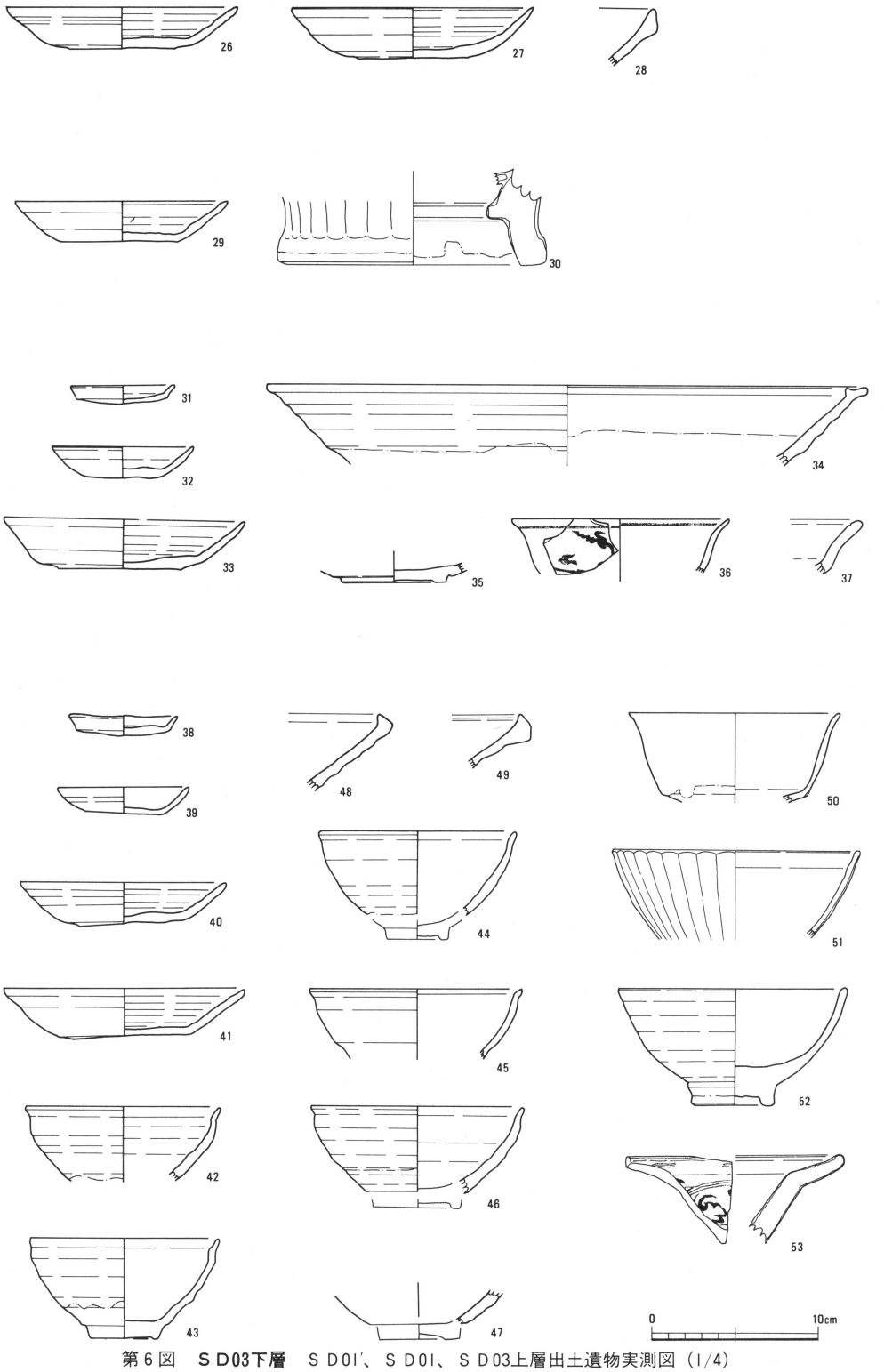
非常に多くの遺物が出土した。38～41は土師器皿である。38は非ロクロ成型で31と同じタイプであるが、作りが粗雑で底部も凸凹が顕著。39はロクロ成型。やや内湾気味に体部が立上がる。40もロクロ成型。糸切痕の少し外側から体部は内湾気味に立上がる。41もロクロ成型。体部は直線的に広がる。口縁端部は内面が直線的、外面が丸く終わる。42～47は天目茶碗である。42～46は口縁部が短く外反する。43は化粧掛けを施し、削り出しの輪高台をもつ。いずれも大窯Ｉ期の特徴を有する。47は化粧掛けが施されておらず、大窯II期の製品であろう。48・49は擂鉢である。いずれも口縁部は内側に折れるが、49はさらに外側に断面三角形の縁帯がつく。50・51は灰釉の碗である。50は、端反りで、腰部は強く曲がる。内外面ともに淡い緑色の釉がかかる。腰部は露胎。51は丸ノミで丁寧に蓮弁が彫られている。52は青磁の碗である。釉は黄褐色で、貫入が多い。磁胎は灰色である。

Ｖ　まとめ

ここでは遺構と遺物の年代について今一度考えておきたい。

前述のように62Ａ区ＳＤ03上層は1559年頃に埋没した遺構と考えられる。その後の発掘調査によると、62Ａ区と幅４ｍの道を隔てた東の89Ａ区西端では、62Ａ区ＳＤ03と平行する幅３ｍ、深さ1.7ｍの溝ＳＤ03を検出し、溝の東側一帯で検出した焼土と炭化物が溝の中へ落ち込んでいる事を確認した（山仲　1990）。またこの焼土と炭化物の層から大窯Ⅲ期の天目茶碗が出土した（楢崎　1990）。陶磁器の年代はいうまでもなく、さらに62Ａ区ＳＤ01の底から大小７組見つかった、折敷の底板を幅１～３㎝ほどに木目に沿って割ったものを３枚組み合わせて作った＊状の用途不明木製品と同種のものが、89Ａ区ＳＤ03上層から１組出土した。これらの成果に加え、地籍図を検討すると、1559年の落城時には89Ａ区ＳＤ03上層と62Ａ区ＳＤ03上層、ＳＤ01、ＳＤ01′によって囲まれた東西43ｍ（地籍図によれば南北100ｍ）の部分が、本丸内の主要建物の位置と推定されるにいたった（金子　1990）。同時期の遺構の見解が異なるため厳密な考察は報告書を待つにしても、62Ａ区ＳＤ03上層はやはり1559年頃の遺構という点では一致している。

ここで一番問題になるのは、焼土層出土遺物の年代である。建物が火事にあっただけと考えるか、それとも落城に際して主要建物が炎上したととらえるかで、ずいぶん意味合いが異なってくる。もちろん前者の場合も考え得る。この場合、火事は（すなわち焼土層出土遺物は）15世紀末から16世紀前半という年代幅に位置づけられる。しかし後者の可能性もかなり大きいのではないか。岩倉城の歴史を振り返ってみると、後者の場合は1488年の落城が該当する。焼土層のすぐ下に炭化物を多く含んだ遺物包含層が認められるが（第３



第６図　**ＳＤ03下層**　ＳＤ01′、ＳＤ01、ＳＤ03上層出土遺物実測図（1/4）

図)、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀（14世紀）の細片が出土しているだけで、大窯製品は全く認められないことからも、この蓋然性は高い。

焼土層出土遺物に大窯Ｉ期の天目茶碗が含まれていることから、これまで考えられていた大窯Ｉ期の開始年代が、静岡県韮崎市堀越御所が焼き払われた延徳３年（1491）以前、からわずかではあるが遡ることになる。貿易陶磁の編年上の位置付けを調べると、染付碗Ｂ群が14世紀後半～15世紀末で中心は15世紀前半、染付皿Ｃ群が15世紀中頃～16世紀中頃（小野　1982)、蓮弁文の青磁碗の施文法から15世紀代（上田　1882）となり、三者が重なるのは15世紀後半になる。矛盾はなさそうである。

ただ１点だけ出土した朝鮮からの輸入品と考えられる遺物が、まさしくそうであるならば、東海地方においては清洲城下町遺跡と名古屋城三の丸遺跡の出土例しか知られていなかったことから（河内　1990)、しかもこの内で最も古い例として、注目に値するであろう。また焼土層から貿易陶磁が異常に多く出土したことから、焼土層を形成したもとの建物の性格などについて関心のもたれるところである。

一括遺物として重要な62Ａ区ＳＤ03上層、89Ａ区ＳＤ03の出土遺物についてほとんどふれることができなかったが、発掘調査報告書をまとめる段階での検討課題としたい。

なおこの小論をまとめるにあたり、小澤一弘、遠藤才文、鈴木正貴、加藤安信の諸氏に多くのご教示を頂いた。また図版作成にあたって岡田智子氏にご協力を願った。記して謝意を表す次第である。

参考文献

水野博隆　1985「中世」『岩倉市史』上巻、岩倉市、359～427頁。
上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』２、日本貿易陶磁研究会55～70頁。
小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２、日本貿易陶磁研究会、71～88頁。
金子健一　1990「戦国城下町岩倉の復元的考察」『年報』、財団法人　愛知県埋蔵文化財センター、118～130頁。
河内一浩　1990「東海地方」『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』、茶道資料館、111頁。
鈴木正貴　1990「尾張の城館遺跡出土の陶磁器」『考古学フォーラム』１、愛知考古学談話会、77～96頁。
楢崎彰一　1990「総括」『尾呂』瀬戸市教育委員会、437～462頁。
山仲廣司　1990「岩倉城遺跡」『年報』、財団法人　愛知県埋蔵文化財センター、36頁。